

Kenichi Yoshida

J'ai, quelque jour, dans l'Océan,
(Mais je ne sais plus sous quels cieux)

J'ai, comme offrande au néant,
Tout un peu de précieux....

Qui vint à l'heure ?

J'offrais un peu de vin ?

Peut-être au creux de mon cœur,

Songeant au sang versant le vin ?

吉田健一集成

Sa transparence accoutumée

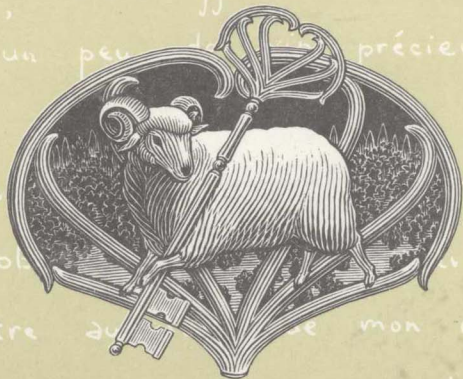
Après une rose fumée.

Reprit aussi pure la mer....

Perdu ce vin, iras les ondes!....

J'ai vu bondir dans l'air amer

Les figures les plus profondes....



吉田健一集成

3

批評Ⅲ

新潮社

Kenichi Yoshida

吉田健一集成

3

[第1回配本]



発行…………一九九三年六月一〇日

著者…………吉田健一「よしだ・けんいち」

発行者…………佐藤亮一

発行所…………株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 営業部〇三―三二六六―五一―

編集部〇三―三二六六―五四―

振替 東京四一八〇八

印刷所…………凸版印刷株式会社

製本所…………加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが、小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替いたします。

吉田健一集成・3 ■ 目次

書架記

ラフォルグの短篇集

「ヴァリエテ」

ブルウストの小説

ドヌ詩集

「悪の華」

ワイルドの批評

エリオット・ポオルの探偵小説

マルドリユス訳の「千夜一夜」

ホップキンス詩集

「パルマの僧院」

イエイツ詩集

「ブライツヘッド再訪」

「テスト氏」

ディラン・トオマス詩集

115 107 99 90 82 73 65 57 49 41 33 25 17 9 7

交遊録

牧野伸顕

G・ロウエス・ディツキンソン

F・L・ルカス

河上徹太郎

中村光夫

横光利一

福原麟太郎

石川淳

ドナルド・キイン

木暮保五郎

若い人達

吉田茂

時 間

239

229

220

210

201

191

182

172

163

153

144

134

125

123

变化

解
題

452

355

吉田健一集成
3

編集協力 清水徹

書
架
記

ラフォオルグの短篇集

この頃余り読まない作者の一人にラフォオルグがある。それが何故なのか考へて見たこともないが兎に角その全集は戦争で中断したままで、その後に見ることが出来たのはパリの Pierre Belmond といふ本屋が出した詩の選集が一冊と戦前にラフォオルグの全集を出してゐた Mercure de France 社が同じ紙型を使つて重版したものと思はれる *Moraliés légendaires* といふ短篇集一冊だけである。これは確か全集の第三巻に当るものでこつちが持つてゐた全集はどうしたかと言ふとその発行を中断させたのと同じ戦争で焼いてしまつた。

フランスでラフォオルグの名前を余り今日聞かないこともこの戦争が多少は関係があるのではないかといふ氣もする。これは色々な事情からフランスの歴史に一転機を劃した事件のやうであつて例へばヴァレリイが戦争中に書いた手紙その他を読んだらとそのことを感じないではゐられない。又この転機はフランスの文学史の上で最も華々しい成果を収めた時代の一つの終りに来たものでもあつて、もしこれからのフランスに期待が掛けられるものならば今日のフランスで誰が読まれてゐないかといふのはどうでもいいことである筈である。考へて見るとラ

フォオルグが一八八七年に死んでからまだ百年とたつてゐない。その間に世界大戦が二つ挟まつてフランスのやうに常にヨオロッパ文明の中心にあつた国にさういふことが起つて何かがあるのではなければ可笑しい。本当は今度の戦争で国が亡びるのではないかと思つてゐたのがそれどころではなかつた。先づ千年は続いた勘定になるフランスの歴史を振り返るのを忘れてゐたのである。

ラフォオルグの本が現在には手に入れ難いといふことから話が逸れてしまつた。別に本が手に入らなくても困ることはないのもラフォオルグのやうに繰り返して読んだ人間のものになると改めて詩集を読む機会を得てどれか一篇の一行を見たとその次の行が自然に頭に浮び、これでは詩を読むといふことをしてゐるのかどうか解らなくなる。併しそれにも増して読んだのが前に触れた短篇集かも知れない。これはラフォオルグにその一冊しかないもので二十七歳で死んだ人間の晩年と言ふのも何か妙であるが、その極く晩年に書かれたものであることもこの短篇集をかういふものにしてゐることが考へられる。同じく詩集では死後に出了た「最後の詩」といふ題のがラフォオルグの詩作中の圧巻であつてそれだけにこゝで言つた理由によつて今読んでも仕方がない。併しそれは従つてその詩を忘れたといふことの反対でその数行、数十行は死ぬ時まで頭の中のどこかで響いてゐるに違ひない。

題と言へばいつかその短篇集の題を訳す必要があつて困つたことがあつた。 *moraliés* といふのはヨオロッパの中世紀に何

かキリスト教の教義に即して道德上の教訓を民衆に説く爲に各種の徳、悪徳などの抽象的な觀念を登場人物に仕立てた芝居でその初めの目的が教訓にあつたのもその娯楽としての性格が次第に強くなつて行つて後のヨオロッパの劇一般に發展したことは説明するまでもない。又さういふ訳だつたから複雑な台詞や仕種で觀衆の笑ひを誘ふといふこともあり、要するに中世紀といふ健康な時代に適した幼稚な血の氣が多くて型破りな芝居だつたと思へば間違ひない。その型破りで闊達であることにラフォログは目を付けたのでそれは何でも自由に、極端を恐れずに言つてのけてその上にそれを茶化して全体に円みを与へることを許し、これだけのことが保証されてゐれば幾らでもその枠内で辛辣に、又優雅に、又素直になる余地があつた。この芝居の一種を短篇の形式に移すことをラフォログは考へたのである。

併しまだ *legendaires* といふことが残つてゐた。この方が寧ろ簡單で *moralités* は字引では教訓劇と出てゐるが、その教訓劇が免に角キリスト教の教義に基いたものだつたのに対してラフォログはギリシヤ、ロオマに始るヨオロッパの伝説全体に材料を求め、これはヨオロッパの伝説といふのがこれもギリシヤ、ロオマ以来凡そ人間的な要素に富む性質のものであることからラフォログはそこから氣に入つたものを選んで実は自分の時代とその時代の生活を描くのに使ふことが出来た。併しこの短篇集の題を訳すことに戻つて、それで字引に出てゐることをそのまま取れば *Moralités legendaires* が伝説的な教訓劇になるが、これでは何のことが解らない。それでもその時はどうして

もこの題を訳す必要があつたのでさういふ日本語にする他なかつた。その途端にラフォログの実際の短篇集はどこかへ行つてしまつた感じがしたが、どういふことでも先づ日本語に直した上でなければ日本では通用しないといふのも厄介なもので我々日本人に日本語しか解らないといふのが既に一つの伝説である。尤もそのことで別にラフォログの短篇自体が傷くといふこともない。これを最初に讀んだ時に経験したことはその後に先にもないもので、こんなことを書いた人間もゐたのかと思ふよりも前世か何かで自分が書いたことをそれまで忘れてゐた感じだつた。ラフォログがその生前に散文の形で發表したのは纏つたものではこの幾つかの短篇だけでシモンズはその散文をランボオのよりも数学の性質を帯びて自由闊達と評してゐるが確かにランボオ、ラフォログ、ヴァレリイとこの三人の散文を並べて見るならばフランスの文学が十九世紀後半から二十世紀前半に掛けての約百年間にその最も実り多い時期の一つを迎へた事情も解る氣がする。フランスの散文は十八世紀に一応の完成に達したことになつてゐる。併し言葉の使ひ方の完成といふのは言葉を使ふ精神が活動する範圍に應じたもので十八世紀のフランスでは後に精神が負担することになつたことをまだ多分に外部の秩序が肩代りしてゐてくれた。その秩序が十九世紀になつて失はれたことは言葉が精神のどのやうな状態にも応じてこれを表すだけの働きをしなければならなくなつたことに他ならぬ。

ランボオの散文詩には言葉で表せないものがあることを恐れ

なくなつた人間の境地が窺へる。その自由をラフォオルグは実地に、そしてそれが出来る所から榮しげに行使して見せてゐてこの後を受けてヴァレリイは言葉がどういふことでも表せることに即して逆に精神にどこまでその活動が推し進められるものか驗してゐる。併しラフォオルグの散文のやうに言葉が自在に使はれてそれが我々の精神の活動も含めて我々の生活を普通にそれを我々が意識する以上に明確に表すものであるのはそれを読むものが殆ど啓示に近いものを経験することであり、それは我々自身の精神の解放であつて全くそこに自分があると感ずることにもがその言葉を前に自分が書いたのだといふ錯覚に陥ることになる。ヴァレリイが言つてゐることはそれが指すことに目を瞠る思ひでその為だにどれ程の言葉の妙技が演じられてゐるか我々が必ずしも氣付かないことがある。併しラフォオルグは我々人間の通常の世界にゐてそれが恍惚の状況から識國下のことに至るまでのものであるから完全に人間の世界なのである。

それで短篇の順では先づハムレットが登場する。別にメエテリンクがシェイクスピアのハムレットに文学に現れた最初のものを考へる人間を見たりした為ではなくてそのことはこの短篇を読めば解る。これはその他に一般にこのハムレットといふ人物に就て言はれてゐることの凡てがラフォオルグの短篇を読むのに少しも必要でないといふことなのであるが、このハムレットの伝説はシェイクスピアが作つたものなのでラフォオルグはそれを使つて自分のハムレットを書いてゐる。ハムレットはもともデンマアクの歴史に出て来る大してどうといふことはない

人物だつたのをシェイクスピアが取り上げてその普通とはかなり違つた境遇に処して普通であることを失はないのであるだけの人間に仕立てた。ハムレットの父親をその弟が殺してハムレットの母親を娶り、それがハムレットに解るといふのが先づ史実と思はれるシェイクスピアの材料でさういふ仕儀になればハムレットでなくてもものを考へる位のこととする。

併しそれを悲劇の約束に託して略す代りに普通の人間がさうした場合にするやうに考へもすれば迷ひもして、そして決心したことを行動に移すこともする一箇の人物を作る道をシェイクスピアは選んだ。確かに所謂、英雄であるべき物語、或は悲劇の主人公が英雄でないこれはヨオロツパの最初の例かも知れなくてこれが併し明治以後の日本で暫くは持て囃された、それでも人間かと思ふやうな代物がシェイクスピアの悲劇の主人公になつたことでないのは言ふまでもない。シェイクスピアのハムレットも独白といふことをするが、これは一人の人間がものを考へてゐるのが舞台で一つの現実になつてゐるのでそれが現実であるからハムレットは策動もし、笑ひもし、人を殺すこともして本当にものを考へるといふことをした人間が凡てさうである通りハムレットにとつてもものを考へるといふことを他の行動から區別する必要がない。ここに一人の血肉を備へて又それ故に精神の持主でもある人間がゐてその人間が何かと面倒なことを片付けなければならぬのがラフォオルグの材料になつた。

それは十八世紀のヨオロツパにあつたやうな秩序が失はれた後はただ生れて育つて年取つて行くだけでも人間は何かと面倒

なことに出会ふからで、これはその人間が人間らしい精神の持主であればある程さうであり、その一人であることを免れなかつたラフォオルグはハムレットの伝説を焼き直して別なハムレット、又見方によつてはシェイクスピアのハムレット以上にハムレットであるものを書くのに必要な着想にも経験にもこと欠かなかつた。そしてそれを読んで打たれるのはこのハムレットがルネッサンスの乱世に状況を仮託して生きる今日の、でないまでも少くとも近代の人間でありながらその乱世がその通りに人間の常態でないことを一刻も忘れてゐないことでこれはシェイクスピアのハムレットがその時代を閼節が外れたものと見てゐることに繋り、その点でもラフォオルグがこの人物を選んだことが頷ける。一口に言へばそこに浪漫主義と正反対のものがある。それはここではどうだらうと構はないことであるがこの人間の常態、平和、平凡、退屈を理想的にでなくて必然的に人間のさうあるべき姿と考へてゐることがラフォオルグの皮肉にも、時には詠嘆にもその価値を与へてゐる。例へばラフォオルグはシェイクスピアの悲劇の筋を自由に変へてゐてそのハムレットは墓場で墓掘りの一人に宮廷の道化役だつたヨリツクが自分の異父系の兄で自分自身は帝王切開で生れて母親が死んだと聞かされてその辺にヨリツクの頭蓋骨が掘り出されて転がつてゐるのを拾ひ上げてかういふ一節になる。

……可哀さうなヨリツク。ヨリツクの知性を小さな蛆どもが食べてしまつた。……あれは先づ尽きない頓智に恵まれてゐ

る私の兄だつた（九ヶ月間は同じ母親だつた訳だ）、尤もそんなことに何かの意味がもしあればだが。あれは人物だつた。それもなかなかひねくれた性格の持主で、そして自信があつた。あれはどこに行つたのか。それを見たものも知つてゐるものもなく夢遊病者だつたことさへも跡形もない。その点ぢや常識といふものさへも消えてなくなるのださうだ。この中に前は舌があつてそれが *Good night, ladies, good night, sweet ladies! good night, good night!* なつと喉の奥から声を出して言つてゐたのだ。又歌ひもして、それが余り品がよくない歌のことであつた。——これは予見した（ハムレットは頭蓋骨を前の方にはふり投げる仕種をする）。又思ひ出しもした（今度は後の方へ同じ仕種）。これは話をし、笑ひ、欠伸もした。——何といふ悲しいことだ。（……）私は明日にも出発して死骸を保存する一番間違ひがない方法を調べて来たい。……歴史上は群衆である人達もやはり曾てはゐて読み書きを覚えたり、爪を切つたり、毎晩燻けたランプに火を入れたりして愛し合つて食ひしんばうで見栄を張つてお世辞や握手や接吻が大好きで噂話をして暮しながら例へば明日のお天気はどうでせう。もう直ぐ冬が来る。……今年は乾し李が食べられなかつたなどと言つてゐたのだ。……

これと次の終りに近い一節を同じ散文で読める幸福といふのは言ひ方が少し変だらうか。その場面はやはりその墓地でそこで夜ハムレットがオフエリアの兄のラエルテスに出会ふ。

——これは、ラエルテス君、貴方でしたか。

——さうだ、私だ。そしてお前が哀れな氣違ひで科学の最近の進歩によつて法律上の責任がないものであることになつてゐなければ私が尊敬する私の父とよく出来た娘だつた私の妹の死を今この瞬間にその墓の前で償はせてやる所なのだ。

——ラエルテス君、それは私にとつてどうでもいいことなのだ。併し貴方の御意見は充分に尊重する積りでゐる。

——天よ、何といふ道義心の欠如。

——さうお思ひになるのか。

——あつちへ行け、氣違ひ奴。でないと私が何をするか解らない。そんな風に氣違ひで終るものは芝居をすることから始めるのだ。

——それで貴方の妹さんは。

——おお。

その時この幻影のやうに明るい月夜に百姓家の犬のどうにも類を絶して孤独な遠吠えが聞えて来てこの立派な人間であるラエルテスの心が（ラエルテスこそこの話の主人公であるべきだつたことに今になつて氣が付いたが、もう遅い）それまでの三十年の生涯が全く説明が付かない無名のうちに過ぎたことで溢れ、又溢れる。これは余りだ。そしてラエルテスは片手でハムレットの襟を掴み、片手で本ものの短剣をその胸に突き刺す。

併しこの調子で書いて行つてはハムレットが主人公のこの短

篇を扱ふだけでラフォルグの短篇集の話が終ることになる。それでもこの短篇集の印象を伝えることは出来るがこれには他に五篇収められてゐてそのどれもがラフォルグの散文といふものであり、伝説を語るといふ体裁で人間を描き、時代を考慮に入れないのではなくて氣が向くままにそこに取材しながら何の遠慮も、そして又それもなくラフォルグ自身が生きたヨオロツパの十九世紀末を料理してゐる点でどの短篇も劣らずそれを讀むものに暫くその讀むものが生きてゐる時代を忘れさせる。或は寧ろそれを思ひ出させると言ふべきだらうか。ただこの中で一篇だけ話を一応は昔に持つて行く代りに現在に舞台を置いて一つの伝説を取り上げてゐるのがあつて、その出来栄が他のと比べて遜色がないことでラフォルグが十九世紀末のヨオロツパの人間らしく殊更に過去と現在を区別しないで人間がゐて又會てゐた所に自分もあるのを認めてゐたことが解る。

この短篇はその伝説がキリスト教のものであることでもこの集でのただ一つの例外である。尤も短篇の題にもなつてゐるその薔薇の奇蹟といふのがどういふ話なのか百科事典などといふものまで調べて見ても解らなくてさう言つたキリスト教の奇蹟といふのが幾らでもあるので大分前に詮索するのを止めたが、それに就てラフォルグが伝説のよりもつと美的な第二の薔薇の奇蹟と書いてゐるのであるからさういふ奇蹟の話が昔からあることは先づ信じていいと見なければならぬ。ラフォルグの短篇ではそれが自分の廻りに血の海が漂ふといふ幻覺にいつも

襲はれてゐる肺病の若い女が或る日その血の海と思つたのが実際に薔薇の花が一面に撒かれてゐるのに変るといふことになつてゐてその若い女が肺病で金持でこれが療養してゐるのが南部ドイツのどこかとも思はれる湯治場であることでそこにヨオロツパの十九世紀末が出現し、そこをラフォルグもよく知つてゐた感じがする。

ここまで書いて来て脱線したいことがもう一つ頭に浮んだ。

その昔、我が国に漢学が盛だつた時代に漢学者といふのが漢籍に精通してゐたのみならずその漢籍に出て来る支那の歴史、地理、風俗その他にも明るかつたことはさういふ漢学者達を書き残したのから察せられて、それが漢学を修めたものに一般に期待されてゐたことでもあつて考へて見ればこれは当然である。さういふことを一切抜きにしてただ文章の意味だけの読書といふのが語の矛盾だからであるがその読書でない何かが今日の日本で普通に行はれてゐる。それでやたらに思想といふことが言はれてゐるのも納得出来て例へばエリオットの「荒地」といふのが別に傑作といふ程のことはなくてもそこに出来来るロンドンの地理を一通り知らずにこれを読んで詩になるかどうかも疑しい。誰もがロンドンに行ける訳でないといふのは愚痴にもならない。遣唐使以後、といふのはこれは殆ど日本の漢学の歴史を通して実際に支那の地に渡つた漢学者は一人もないのに近い。

例へば石川淳氏が橘中之楽に触れ、商山のことを言ふのはE・M・フォオスタアがその小説の一つでケフィツソス河がキヤム河とともに流れてゐると書くのと同じで明かに文学の世界

の一部をなしてゐることであつてもそれが中学の教科書にでも出てゐるのでない限り註釈を付けなければならないといふのは、であるよりもさうなると一体誰に対して遠慮してゐるのか聞きたくなる。又それをここで書くのはこれが実際に不便だからでそれは更に一般に今日書かれてゐることを疑しくし、バルザックとかブレヒトとか言つた所でその名前を挙げてゐるものがそれならば何の積りでさういふことをしてゐるのかと思ふ。これは学ではなくて本を読むのに必要な知識の問題であつてこの二つが同じであることに気付いたならば学が必要でない文学といふのが太古の時代に終つてゐることを改めて考へるべきである。又その程度の学ならばただ読んだことを理解する為に努力するだけで身に付けることが出来る。

併し兎に角ここに薔薇の奇蹟が行はれたラフォルグの町がある。前にまだこの短篇集が焼けた記憶だけだつた間、

L'orchestre hier a joué
Le dernier polka.

昨日、楽隊が

最後のポルカをやつた。

といふ句がこの短篇に出て来るのだと思つてゐたが今探して見てもないからこの楽隊が最後の曲を演奏してしまつたといふ夏の盛り場も終りに近づいた頃の情景はそれを歌つた詩が詩集